

特別展 「浅井忠、あちこちに行く—むすばれる人、つながる時代」

千葉県立美術館（中央区・中央港1） 2024. 10. 30～2025. 01. 19

本展は、当館開館 50 周年を記念して、日本画家の先駆者として知られて日本画、工芸、図案など多様な分野で活躍した千葉県とゆかりのある「浅井忠」（1856～1907）新規収蔵作品「8点」を含む「約 200 点」の作品とあわせて、貴重な日記・書簡も展示して、世代にわたり慕われた人物像に迫るものである。

画伯の画風は、「ミレー」「コロー」などのバルビゾン派の中に位置すると指摘されていて、特に農民生活の描写は「ミレー」の画風と類似している。

この「バルビゾン派」とは、一般に印象派が登場前の 1830～70 年頃まで、フランス・パリ郊外の「フォンテーヌブロー」の森や「バルビゾン村」周辺風景を取材して、新しい風景画を開拓した画家たちの総称として名付けられたもの。



《漁婦》 1897（明治 30 年）

油彩/カンヴァス

房総での近景から遠景にかけての砂浜や岩、かすかにのぞく海、曇り日の空、そして前景に位置する「漁婦」たちがうまく溶け合ったバランスの良い作品で、色調は脂（やに）っぽいのが、これまでよりは明るくて、筆触ものびのびしている。



《京都高等工芸学校の庭》

1903 年 紙/水彩

画伯は、ヨーロッパから帰国後は、洋画指導のための私塾を開設して、後身の育成にも力を注ぎ、現在の「京都工芸繊維大学」の教授を務めて、次世代の日本画壇を代表する作家を数多く輩出した。この作品は、四季折々の花の形状や色彩を、何時でもデッサンできるように設けられた花瓶を描いたもので、「立葵」（タチアオイ）の花はシンボリックな花である。